

JOEFA

2014-1



<目次>

巻頭インタビュー・小祝政明 代表理事に聞く

日本有機農業普及協会がめざすこと（その1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2p

土質にあった野菜苗用有機培土の製造・・・徳島県・小松島有機農業サポートセンター 中村隆宏 10p

みみずフン土でイネ育苗用覆土・・・・・・・・・・・・・・・・徳島県・(株)豊徳 大栗正裕 14p

鶏ふんの堆肥化が環境保全型農業推進の核となる・・・・・・・・徳島県・石井養鶏農業協同組合 阿佐 章 16p

「のれん分け」で新規就農者の自立を支援・・・・・・・・島根県・いわみ地方有機野菜の会 20p

新規就農のため 播種・育苗システムの考察・・・・・・・・熊本県・農業生産法人キッチンガーデン(株) 25p

有機栽培で日本と海外との架け橋をつくる・・・・・・・・NPO法人 日中蒙農業交流協会 竹田恭一 28p

中国で砂漠化防止に取り組む・・・・・・・・NPO法人 日中蒙農業交流協会 竹田恭一 31p

★トピックス★「抗酸化力」という品質評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34p

日本有機農業普及協会の設立にあたって／組織概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 36p

●巻頭インタビュー

日本有機農業普及協会がめざすこと（その1）

小祝政明 代表理事に聞く

日本有機農業普及協会はどのような目的を持って設立され、どのような活動をめざすのか、代表理事である小祝政明氏に伺った。

農業の現状と有機農業

・・・今日はこのたび立ち上げられた一般社団法人日本有機農業普及協会（以下、「普及協会」と略記）について、設立の目的や事業内容などについてお聞きしたいと思います。

早速ですが、日本の農業の現状として、後継者不足や高齢化、田畑の休耕・荒廃ということがよくマスコミにも取り上げられています。その一方で、食品の安全・安心への関心が高まっており農業への期

待も大きい。そして、多くの団塊の世代が帰農し始めている、若者の新規就農の動きもあります。このようななかで、「普及協会」を立ち上げたわけですが、その理由からお聞かせ下さい。

小祝…「普及協会」を立ち上げようと思った理由からお話ししましょう。まず、消費者が安全な農作物を求めている実態があるということです。そ

して、農業にそのような安全な農産物の生産を求めるようになってきました。

しかし、安全な農産物をつくるはずの有機農業には、残念ながら体系的な技術がありませんでした。そのため、有機農業ということで栽培された作物も、品質がよかったり悪かったり、収量が少なかったり多かったり、と安定した生産ができない状況でした。

これでは経営として安定しない。有機農業が産業として成り立っていないかった、ということなんです。それで有機農業を技術としてきちんと体系化して、産業として成り立つような普及をしたい、というのが「普及協会」立ち



日本有機農業普及協会設立のねらいや、これからの役割について語る小祝政明代表理事

上げの原点となったのです。

「普及協会」でどのような取組みをしていくのか

1 有機農業技術の 開発と普及について

・・・それではもう少し具体的に、どのような活動・取組みを行なおうとしているのかについてお聞きしたいと思います。定款の第4条に「普及協会」の行なう事業のリスト（三六ページを参照）がありますが、その内容に沿って具体的にお聞きしたいと思います。

*さまざま分野ごとに技術開発

・・・まず、有機農業技術の開発と普及についてですが、有機農業技術の開発とは、具体的にどのようなことを念頭に置いているのでしょうか。

小祝・・有機農業といっても、農業という技の中にカテゴリーとしては入っています。技にはさまざまな技術の分野があります。たとえば苗をつくる技術、堆肥をつくる技術、微生物を扱う技術などがあります。そこで、それら

ひとつひとつの技術について個別に技術開発をし、的確に情報を伝えていくことが総合的な有機農業を完成させるためには重要になります。

*基本は植物生理にあった有機栽培

・・・有機農業のひとつひとつの要素について技術化していくということですね。

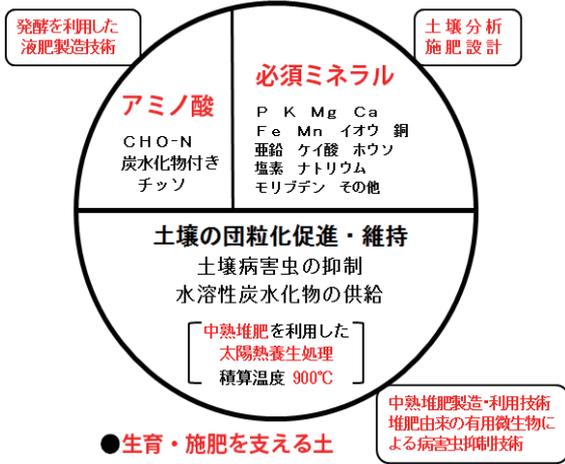
そうすると、基本となる有機農業技術とは何になるのでしょうか？ 有機農業といわれてもさまざまなイメージがあるんですが・・・。

小祝・・そうですね、有機農業といっても、基本的には植物生理から逸脱することはできないので、植物生理にあつた有機栽培、というのが基本だと思っています。

・・・植物生理にあつた有機栽培ですか。もう少し具体的にいうと・・・。

BLOF理論

- 細胞をつくるアミノ酸
- 生命維持に不可欠なミネラル



●生育・施肥を支える土

小祝…有機栽培というと、どうしても有機物だけに目がいきがちです。しかし有機物だけでは植物は光合成ができません。植物が生きていく原理、植物という生き方の根幹をなす光合成が、どういう仕組みで行なわれているのか、といった根源的なところから考えていく有機栽培ということになると思います。

***植物生理を踏まえた技術開発**

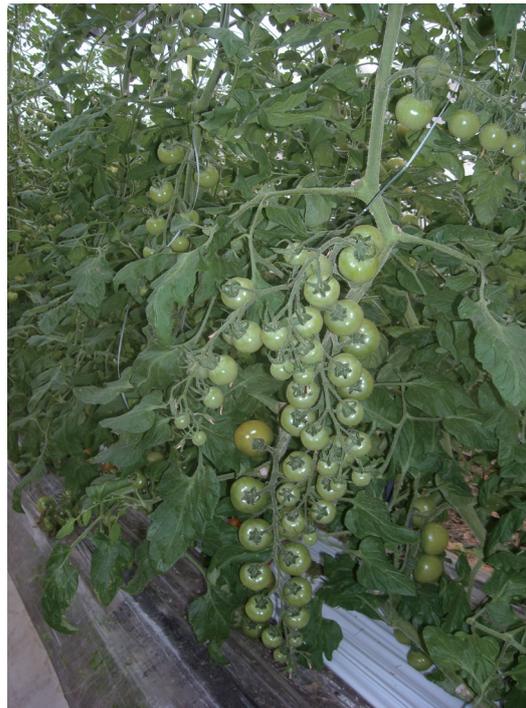
…ということとは、これまでそういうことを柱にした有機農業の技術という

ものはなかったというところですか。

小祝…環境問題とか、地域の有機物循環とか、どちらかというと技術というよりも思想的な面が強かったように思います。もちろんそういう部分は大事なんですが、少なくともその前に植物の生き方、植物生理があるわけです。つまり、植物生理を踏まえて地域循環や栽培というのを考えなければいけない。そういうふうな技術の開発や進め方の方向性を考えています。

…堆肥を入れれば有機だ、というような考え方がありましたが、そのようなやり方では、技術的に収量や品質が安定しない、限界があった。

小祝…そうですね。たとえば堆肥を入れれば有機農業だといわれていましたし、そのようにやっていた方も多かった。しかし、そのような栽培で



有機栽培のミニトマト

は、虫や病気が多くて、収量が上がらない、品質が悪いということで、最終的には有機農業を断念して撤退する。実際そういう方が多かった。それから微生物さえ使えば有機栽培は完成するんだという発想でやった方もほとんどの方は撤退していった。つまり、(堆肥だけ、微生物だけという)偏った考え方は有機農業は完成しないし、経営として持続することはむずかしい、ということ。栽培に必要なさまざまな分野をマスターし、それらを総合して有機でやるということが基本だと思います。

●一般社団法人 日本有機農業普及協会の設立にあたって

「食」は人びとの生命を維持し、健康的な暮らしを営むために、不可欠なものです。その「食」を私たちは、太陽と土、そして水によって育まれた生命（有機物）の連鎖の中から「農」の営みによって掘り上げて利用してきました。そして、土や作物へ働きかけ、同時に土や作物から働きかけられる「農」の営みの中から、地域的に特色のある多彩な「食」がたちまちくぐられてきました。

しかしいま、「食」と「農」の分野では、憂うべき事態が進行しています。

地球的な視点から見ると、砂漠化の進行による農地の喪失、地下水の枯渇による生産の縮小、森林の伐採などによる表土の流亡などがきわめて大規模に進行しています。「食」と「農」を支え続けてきた土や水の持続的な活用に赤信号がともっています。

日本国内に目をやれば、「食」の安全性に対する疑念と、安全・安心な「食」を求める気運が高まっています。しかし、そのような要請に応えられる「農」の営みは心許ないのが現状です。農村の過疎化や農地の荒廃、そして農家の高齢化、後継者不足など、課題は山積しています。「食」と「農」を支え続けてきた農家・人びとの足もとが揺らいでいます。

しかし、いっぽうで定年退職者の就農（定年帰農）が進み、若い世代や「食」や「農」に関わる人たちの間では、有機農業に対する関心が高まっています。ただ、新規就農しても経営を確立・維持できずに、多くの方が三〜四年で撤退を余儀なくされています。また有機農業に切り替えたいという農家も、その技術や経営を学ぶ機会が十分に用意されていないのが現状です。有機農業の

受け皿をどうつくり、有機農業をどのように学び、経営をどのようにして確立・維持していくか、という課題への取り組みが求められています。

このような課題を解決するためには、有機農業技術を確立し、その技術を普及し、さらに技術としての精度を高めていかなければなりません。そのために、日本有機農業普及協会を設立しました。そして私たちが構想する植物生理を基礎に置いた有機農業技術の確立・普及によって、日本国内の「食」と「農」に対する課題にこたえ、同時に、砂漠化や表土の流亡の阻止、水の効率的利用など、地球上の広範な地域で進行している事態にも有効な手立てを提供することができると考えています。課題解決の担い手は世界の各地域に住んでいる人びとです。日本国内だけでなく広く世界へ向けた情報発信・人材育成が必要な理由がここにあります。

安全・安心で美味しく栄養豊かな「食」をつくり続けること、そのような「食」を支える「農」の営みを継続していくこと、これらを同時に進めていくことが大切です。「食」と「農」は車の両輪です。支え合い、補い合うことで前に進むことができます。そして有機農業は、「食」と「農」という両輪を持つ車をまっすぐ力強く進めるために欠かせないツールであり、生き方でもありません。

有機農業の技術を確立し、広めていくことは、「食」と「農」にまつわる現代の課題を解決していくための王道でもあります。私たちはその一翼を担い、自立し、信頼される地位を占めたいと考えています。

私たちは、自覚的な生産者・消費者、関係団体などとともに、有機農業の普及を目指します。そのために、ひとりでも多くの方に、日本有機農業普及協会に参加してほしいと願っています。未来は私たちひとり一人の自覚と行動にかかっているからです。

●日本有機農業普及協会の組織概要

目的

当法人は有機農業技術の開発と普及、及び有機農業を目指す新規就農者支援事業を行う。また同時に砂漠化防止技術の開発とその普及を行うことにより、地球環境保全活動に資すると同時に有機農業技術普及と砂漠化防止活動に関する国際協力活動を行うことを目的とする。

事業内容

- (1) 有機農業技術の開発と普及
- (2) 有機農業を目指す新規就農者育成事業
- (3) 砂漠化防止技術の開発と普及
- (4) 海外からの農業研修生の受け入れと有機栽培技術指導
- (5) 海外への農業技術者の派遣と有機栽培技術指導
- (6) その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

本部

代表理事 小祝 政明

所在地

〒三九六〇一〇一

長野県伊那市美篋一〇二二

《株》ジャパンバイオファーム内》

TEL 〇二六五〇七六〇〇三七七

FAX 〇二六五〇七六〇〇九〇〇五